≪博士論文要約≫

中世都市奈良の考古学的研究

佐藤　亜聖

序論　日本中世都市研究の現状と奈良

本研究の目的は、日本中世都市研究における宗教都市の位置づけを明確化すべく、その代表的都市である奈良を対象として、考古学的方法を用いて検討することにある。また、従来断片的な情報を過大評価する傾向があった考古学的都市研究に対し、考古資料を軸に俯瞰的視点から検討を行うことで、考古学による中世都市研究に新しい視座を供することも目的とする。本研究は、研究の前提整理と古代都市から中世都市への移行を扱う第Ⅰ部、都市内部の多様性を検討する第Ⅱ部、都市奈良を外側から俯瞰する第Ⅲ部の３部構成となっている。

第Ⅰ部　古代都市から中世都市への転換とその背景

第１章　中世都市奈良研究の軌跡と射程

第Ⅰ部ではまず研究の前提を整理した。中世都市奈良に関する研究を近世に遡って整理すると、その宗教都市としての性格上、寺院史的観点からの研究が大半で、また基礎史料も『大乗院寺社雑事記』や『多聞院日記』など中世後期の史料に偏重しており、考古資料を基にした景観復元的研究や中世前期の都市形成過程を扱った研究は僅少であった。そのため、①古代都市平城京の衰退から中世都市奈良成立過程の解明、②中世的都市構造の実態とその発生要因の解明、③都市空間の変遷把握、④中世都市から近世都市への転換過程の解明、⑤大和国における奈良の位相解明、といった点が課題として残されている。そこで、本研究では基礎資料として、外京域を除く平城京域における長岡京遷都以降の遺構検出地点 619 カ所、外京域におけるすべての発掘調査地点 486 カ所、計 1105 カ所のデータを集成し、主に考古学的資料に基づく分析を行った。

第２章　奈良における土師器皿の編年 - 研究の前提 -

考古資料を用いて研究を行う上でまず研究の基礎となる編年機軸を整備すべく、土師器皿の編年を試みた。奈良における土師器皿の分析については、筆者も深くかかわった奈良市教育委員会による編年案の提示（『南都出土中近世土器資料集』奈良市教育委員会 2014 年）があるが、筆者の年代観と若干異なる点があり、また中世後期の編年が十分提示できなかった。このため、11 世紀後半から 17 世紀初頭までの土師器皿について改めて型式分類を行い、3 段階 24 小期を設定し、実年代の付与を行った。

第 3 章　古代都市平城京における外京の位置づけとその実態

本章では中世都市の前提となる平城京外京域について分析を行った。

まず地形区分を見ると、外京域は春日断層に起因する断層崖に分断され、台地上、傾斜地、扇状地・谷底低地の 3 地形帯に分けられる。条坊道路は一部不明ながら 3 地形帯全体に面的に敷設されている。その規格はほぼ 1 坊 1500 大尺を基準とした東四坊大路以西の通常京内と同じであり、平安京周辺都市群の街区に見られるような規格の違いは見られない。ただし、東西方向道路に道路幅員の半分以内に収まる誤差があり、南北方向距離が若干不安定である。また、実際の施工については一部道路遺構に小尺設計のものがあり、実際の施工が若干遅れる事例も存在する。

外京域の遺構密度は東四坊大路以西の通常京内に比して著しく低い。遺構は主に台地上の寺院周辺に集中し、断層崖傾斜部と低地部には少ない。ただし、低地部では坊単位で遺構の粗密が確認でき、坊を単位とした居住規定が存在していた可能性が考えられる。いずれにしても、居住空間としての利用の有無に関係なく条坊道路は敷設されており、条坊道路の敷設は都城の表象として極めて政治的なものであった可能性が考えられる。

このように中世都市奈良の原風景とでも言うべき外京域は、平城京内という扱いを受けつつ、「極めて消極的な利用形態」であったことは強調してもよいだろう。

第 4 章　長岡京遷都後の平城京と中世都市への萌芽

本章からは中世都市に力点を置いた検討を行う。まず平城京廃都以降の旧平城京域における遺構分布を検討した結果、奈良が中世都市へと向かう最初の画期は、旧平城京域の遺構が減少に向かうのに反比例して、後に都市域となる外京台地上の地域に遺構が増加し始める 10 世紀前半に求めることができた。9 世紀後半～10 世紀前半の平城京域は、それまで残存した条坊側溝が埋められ、耕地化が進展する。同時期、平城宮域でもそれまで維持管理されてきた宮の施設跡地が解体し、耕地化へ向かう。同様の傾向は平城京以前の宮都である藤原宮、飛鳥宮でも確認できる。こうした古代旧都の跡地の管理については王家の家産として扱われたと考えられ、こうした王家家産の管理体制の変化が都城域の耕地形態の変化を生み出し、必然的に旧平城京域の土地利用を変化せしめたと理解できる。

平城京廃都の後、本来であれば、廃都直後から道路を中心として農地が展開していったはずであった。しかし、現実には平城京跡地はそこにかけられた古代的権益のため、無秩序な展開は抑制されていた。9 世紀半ば以降、こうした体制が転換した結果、10 世紀前半になってようやく都城域の農地化（水田化）が進展、同時に寺社門前の外京域は、寺院内外における子院の成立など多角的展開を背景とした都市化への指向を歩み始めたと考えられる。古代都市平城京廃都から中世都市奈良の成立は、連続的に地域拠点が変化したものではなく、古代的な権利関係の転換を受けてはじめて農村に向かう地域と、都市化に向かう地域に分離したと言えよう。

第 5 章　中世都市奈良の成立

本章では平城京外京域における遺構分布の検討から、奈良における中世都市の成立を、台地上に安定して遺構が展開し始める 11 世紀後半に求めた。そして興福寺諸郷においては発掘事例から 11 世紀段階には現在の町割に繋がる地割が 11 世紀末から 12 世紀初頭に形成されていることを指摘した。こうした興福寺諸郷と町割り形態が異なる東大寺門前地域では、10 世紀代から連続して平城京条坊区画を再利用する形で道を中心とする街区形態が成立しており、12 世紀半ば～後半の史料にはこれが明確に見いだせることを指摘した。さらに、史料中の屋地規模の記載から、こうした条坊区画を利用した土地利用に際しては、平城京時代の道路心を基準点とする条坊規格がそのまま応用されていること、これが奈良特有の奈良間の起源となった可能性を述べた。さらに奈良におけるグリッドプランと街区のあり方を、平安京周辺の政治都市と比較することで、都市の性格と方格街区の関係を整理して奈良の街区形態を宗教都市の特質と位置付けた。

第 6 章　治承兵火と奈良

奈良の都市化における最大の画期は、治承兵火による都市壊滅であると考えられてきた。しかしながら、実際の火災痕跡は寺院内部において顕著であるものの、寺外においてはほとんど見つからない。奈良における都市形成について、遺構変遷からみると治承兵火前後の時期が一つのピークであるものの、都市空間の拡充は治承以前にすでに始まっていた。このことは第 5 章で確認したように、後に南都七郷に編成される辻を中心とした町割の成立に表れている。このことは火災による都市壊滅が新たな町割を生み出したわけではない事を示す。

しかしながら治承兵火前後に新たな町割が形成される事例も散見される。こうした開発は従来遺構が展開していなかった部分で行われており、火災による復興ではなく、火災によって壊滅した寺院群の復興に伴う町域の活性化を背景とした新規開発であるといえる。

これらの点から、従来から指摘されていた治承兵火が中世都市奈良に与えた大きな影響は、焼け野原からの都市再生ではなく、既存街区内部の拡充と縁辺部の新規開発、そしてその把握をめざした制度の変革であったと結論付けることができる。

しかし治承兵火は奈良の核であった諸大寺を壊滅させており、その復興は実際の都市景観にも影響を与えていることは事実である。大乗院周辺では寺内およびその周辺で焼失した子院群の復興が 12 世紀末～13 世紀前半に行われ、これに触発されて大乗院郷内の整備が促進されていることが判明し、火災が都市に影響を及ぼしてゆく具体相を垣間見ることができる。

第Ⅱ部　中世都市奈良の諸相

第Ⅰ部において古代都市平城京から中世都市奈良に到る歩みを見てきた。第Ⅱ部は都市奈良の諸相として都市をめぐる諸属性について検討を行う。第Ⅱ部では奈良が都市として

確立する 13 世紀の画期を「都市の成立」というキーワードで読み込み、さらに手工業生産関連遺物の出土状況を通して文献ではよくわからない中世前期を中心とした商工業のあり方を検討する。

第 1 章　都市空間の変化と機能分化

都市空間の充実と都市装置の成立を概観すると、まず、遺構分布からは、13 世紀後半までに都市縁辺部の開発が進行し、「元興寺極楽坊念仏講番衆札」や「元興寺中門堂懸板記文」に見られるような現在と共通する地名が完成していたことがわかる。さらに、北市や南市といった奈良独自の市も弘安年間以前に完成する。また、都市内外の商工業をみると、金属器生産が 11 世紀代から興福寺西辺で出現し、12 世紀以降東大寺と興福寺の寺辺および元興寺北西部において確認される。特に元興寺北西部の地域は金属器生産だけでなく、獣骨や鹿角などの加工も行っており、一種の職人町的景観を持っていたと考えられる。当地には鎌倉期に浄土寺（新浄土寺とも）が創建されるが、この浄土寺の性格は都市寺院として職能民との深いかかわりを前提としていた可能性がある。

その後 1414 年には当地に中市が立てられる。同時期、周辺では甕蔵の建設が盛んに行われるようになるが、中市が六方衆によって立てられること、周辺の都市管理には六方衆が力を持っていたことなどを考え合わせると、市立てと甕蔵の出現には六方衆の力が背後にありそうである。

さて、13 世紀の都市充実に伴い、交通路も変化を生じる。それまで奈良時代以来の歌姫・うわなべ越えの北路が京都方面の幹線道路であったものが、般若寺坂越えのルートを幹線道路とするように変わったのがこの頃ではないかと考えられる。こうした変化の陰には西大寺流律宗の活動が見え隠れするが、その主体としては彼らを利用した興福寺の動きが考えられよう。

第2章　鎌倉時代末の奈良における産業再編

奈良における産業形態は主に文献史学を軸に検討されてきた。こうした文献史学で見られる手工業生産像と、前章において概観した考古資料から推定できるその姿の間には大きな隔たりが認められる。その最大の理由は残されている文献史料がいずれも中世後期のものが主で、中世前期の情報が主である考古学側とうまくリンクできていない点にあると考える。第2章では移行期に当たる13世紀から14世紀の奈良において、大規模な産業再編があった可能性について、瓦質土器と呼ばれる土器の成立を通して検討した。

都市内部における手工業民は13世紀後半以降大きく再編を受けたと考えられるが、それを如実に反映するのが『職人歌合』にも記載のある輪花形火鉢の成立過程である。輪花形火鉢は検討の結果、14世紀初頭頃に、瓦器火鉢をベースとして土器工人と瓦工人の計画的融合の結果生み出された商品と結論付けられる。そして出現当初から京都方面への販売ルートを確保しているなど、強力な保護のもとにあったことが指摘できる。『大乗院寺社雑事記』には火鉢作座が興福寺大乗院に属していたことが記載されており、中世前期から後期

への移行期にこうした興福寺主導の強力な産業再編が行われたことが窺える。

第 3 章　考古学からみた中世都市奈良における葬送空間の変遷

本章では都市住民の都市共同体の形成とも大きく関わる墓制の変化に着目し、その変遷を検討した。

平城京廃都に伴う造墓規制崩壊により、旧平城京域ではわずかに墓が造られるようになる。しかしこれらは長続きせず、その後墓が不明確になる。都市奈良においては墓が不明確な状況が長く続くが、12 世紀後半に位置づけられる十輪院出土の常滑甕は、当時の葬送のあり方や周辺環境から納骨施設であった可能性が考えられ、それには元興寺で行われていた念仏講衆が関与していた可能性があり、平安後期の奈良において火葬・納骨・念仏講のセットが成立していた可能性がある。鎌倉時代になっても墓そのものは不明確なままだが、元興寺極楽坊にみられるように念仏講および納骨信仰が盛行し、これに伴う火葬も盛んに行われるようになった。文献史料からは 16 世紀以降墓の存在も確認されている。墓制の大きな画期は 16 世紀後半から 17 世紀初頭であり、この時期境内墓地を有する小規模寺院を中心に、小規模な地縁共同体にもとづく新興階層が新たな墓域を形成、旧来の造墓規制を大きく変容・解体させ、墓地景観を近世的なものへと導いてゆく。

第 4 章　日本中世都市における葬送地と奈良の特質

前章を受けて、本章では奈良の都市を他都市と比較することで、その特徴を炙り出した。奈良の墓地構造は、古代都市が私領化されて分断されてゆき、やがて都市内に墓地が発生する平安京とは異なり、むしろ、墳墓堂以外に墓はみられず、居住域外である北上川対岸の元町Ⅱ遺跡に集団墓地を営む平泉と共通する点が多い。共に計画都市の中世的展開という方向性は同じである。これに対し同じ中世を代表する博多は、成立初期には屋敷墓的な土葬土壙墓が多数営まれ、都市成熟に伴い13世紀には墓が周縁に追い出される。これは都市でないものから都市へと発展していったその性格を如実に表している。これに対し、中世における計画都市である鎌倉では、奈良同様中世を通じて都市内に墓は見られないが、13世紀後半以降やぐらや浜地の墓地が形成される。その形成原理は都市を構成する都市民（武士階層）の都市への定着によって、都市周辺にイエ原理の葬送地が出現するという経緯を体現したものであった。このように「都市」における墓制の展開は、都市の形成要因や構成住民の階層、集住原理などに大きく規制されており、その分類は都市研究に重要な視座を提供するものと考えられる。

第 5 章　元興寺旧境内主要伽藍域の変遷と中世都市奈良の終焉

本章では視点を変えて、こうした奈良の諸相を通じて浮かび上がる中世的な奈良の姿が、

どのような過程を経て近世「ならまち」へと変貌したのか、という点を検討した。

近世の奈良は、『奈良曝』記載都市居住者の業種別居住地で見られるように、興福寺・東大寺近隣の寺社関係者と、旧奈良縁辺部の下層民という階層別居住状況が確認でき、中世以来の都市基本構造を維持していたと言える。これに対し、元興寺旧境内における景観変化は著しい。元興寺旧境内、特に僧房以南の主要伽藍域は 16 世紀後半頃まで空閑地として維持されており、その後急速に町家化してゆく。特に 17 世紀初頭には礎石の埋没処理と鍛冶関連職人の集住という大規模変化に曝される。これらは、織豊期～幕藩体制確立期に到る政治転換期における、興福寺六方衆を主体とした中世的都市規制の解体過程を示すものと考えられる。

第Ⅲ部　周辺から見た都市奈良の座標

第Ⅲ部では中世都市奈良を外側から眺める視点で考察した。

第 1 章　惣墓の形成と村落の墓制

第Ⅱ部において都市における葬送共同体が庶民化、細分化の方向を示すことを明らかにしたが、この状況は都市化の進展を示す都市独自の現象であるのか、という点を明らかにするために、農村部の墓制と比較を行った。

奈良盆地南端にある高取町市尾墓地は奈良県を代表する惣墓であり、現在は墓郷の共同墓地であり、両墓制の埋め墓となっている。この墓地には多数の組み合わせ式五輪塔が存在しており、14 世紀以降、領主クラスの集団墓地であった事がわかる。周辺では 13 世紀代の散在する名主層の墓地があり、これが 14 世紀になると姿を消すことから、名主層が越智氏を頂点とする武士団を形成してゆくことに伴って、市尾墓地に収斂したと考えられる。その後在地領主である越智氏の没落にともなう 16 世紀後半～17 世紀前半までの空白期間を経て、近世に入ると一般民衆の惣墓としての市尾墓地へと変化してゆき、現景観を生み出してゆく。こうした市尾墓地の形成過程は、地縁的結合の強い都市部と異なり、武士化した有力農民層の惣的結合の強力さを明確に示す。

第 2 章　農村寺院における寺辺整備

前章までに都市住民に主眼を置いて検討を行ったが、都市寺院と都市の関係を相対化させるために、村落と寺院、開発の関係を大和盆地北部、西大寺周辺で検討してみた。

西大寺は称徳天皇創建以来の古刹であるが、平安期以降衰退を続け、平安後期には周辺農民を寺僧として取り込むことで農村寺院化したと考えられている。西大寺南方は区画整理事業に伴い、広範囲の発掘調査が行われているが、そこでは 12 世紀代に低地部を中心に居住域が広範囲に点在しており、補助的水源を利用して耕地を拡大させていたが、当該期には面的開発が限界を迎えていた。この状況を打破するには技術革新と集約的土地利用法の導入が必要であったが、13 世紀後半には急速にこれが達成されている。その背景には喜

光寺復興を名目にした西大寺の開発請負が存在したと考えられる。同様に西大寺北方の京北条里地域でも同時期、広範囲の開発が進展しており、これにより北に隣接する秋篠寺との間に住民と水源の帰属を巡る相論が起こっている。さらに東方地域ではこうした開発と西大寺による寺辺農民の編成が 13 世紀前半には開始されている状況が確認できる。

13 世紀における農村、都市双方を通じた寺と寺辺所領との関係は、前者による後者への関わりが、直接的に景観へ影響を及ぼす点が最大の特徴である。また、都市部と農村部双方でほぼ同時期に開発と整備が進展することも特徴的である。

第3章　大和における中小寺院の動向

都市寺院を相対化させるために、大和国内の農村寺院についての調査事例を集成した。その結果、以下の点が明らかになった。

まず9世紀末から11世紀初頭頃にかけて、不退寺や坂田寺、飛鳥寺、豊浦寺、山田寺、達磨寺、巨勢寺、二光寺など、特に規模の大きな古代寺院の系譜を引く寺院において堂舎の荒廃が目立つ。これら古代的景観を維持できなくなった古代寺院は全体的に寺盛が低迷していたと考えられるが、その後、12世紀末から13世紀初頭には急激に復興が行われるようになる。文献からは正暦寺（1218年）、橘寺（1203年）、安倍寺（1234年）などが見られるが、考古資料でも額安寺、橘寺、内山永久寺、豊浦寺などに当該期の堂舎整備の痕跡が確認できる。重源による南都復興後の余剰人材を利用したものであろうか。

13世紀後半から14世紀初頭には再び復興の機運が高まるが、この時期の寺院復興には前段階と異なる側面が見られる。それは中小規模寺院復興原理の変化と、小規模寺院の興隆であるが、これは当時力を伸ばしてきた農村域の有力名主クラスを支持母体として、新たな形の寺院復興が展開したものと考えられる。

全体を通して言えることは、都市において何らかの変動がみられる時期に、農村寺院においてもやはり変革が見られることである。9 世紀～10 世紀前半の寺院衰退は国家的な変動と、13 世紀前半の復興は本寺たる興福寺や東大寺の復興と、そして 13 世紀後半～14 世紀前半の復興は在地領主層の台頭とそれぞれ連動していると考えられ、これは都市奈良にも影響を及ぼしている。

終章　日本中世都市研究における奈良

以上、本研究では中世都市奈良について、主に考古学的研究に軸を置いて、その成立前史から近世都市成立までを通史的に俯瞰してきた。その結果、9 世紀後半～10 世紀前半における古代都市平城京からの脱却、150 年の断絶を経て 11 世紀後半の都市成立とその背景、治承兵火とその影響、13 世紀以降の都市整備と産業のあり方、葬送を基にした奈良の独自性と共同体のあり方、周辺農村から見た奈良の姿、そして中世都市から近世都市への変化などについて、おぼろげながら全体像を把握できた。

本研究の最も重要な課題は「宗教都市とは何か」であった。この点については未だ解明したと宣言するには程遠いが、①都市成立期において、古代都市における古代的都市規制

の弛緩がそのまま都市形成に結び付かない点、②都市成立には都市中心核である大寺の、伽藍寺院から院家寺院へ、という中世的転換が必要であった点、③13 世紀の都市空間充実が都市中心核である大寺の復興を前提としていた点、④定着した都市民が、地縁・血縁以外に信仰に基づく共同体を形成した点、⑤中世都市から近世都市への転換が、都市権力主体である興福寺（ただし惣寺としての興福寺よりも、実務を担当する衆徒など内部組織）を構成する農村部領主層の動向と連動している点、⑥近世都市への転換が中世的宗教規制の崩壊を伴うこと、を明らかにしたことによりその輪郭を描き出した。本論を一つのモデルケースとして、今後宗教都市についての研究が広く展開してゆくことを期待したい。